第90回ジェンダーセッション

クィア・フェミニズム批評とメンズリブ批評の対話

水上　文、杉田　俊介

片上平二郎：本日は立教大学ジェンダーフォーラム主催、第90回ジェンダーセッションにお越しいただきありがとうございます。本日は「クィア・フェミニズム批評とメンズリブ批評の対話」というタイトルで、水上文さんと杉田俊介さんにお越しいただき、お2人で対話をしていただいて、現代のジェンダーに関するもろもろの問題などを考えていきたいと思っております。それでは、ここからはお2人にお任せする形で進めていこうと思いますので、お願いいたします。

水上文：よろしくお願いします。水上文（あや）です。

杉田俊介：こんにちは。杉田俊介です。片上さんからお声がけいただいて、どなたかお話ししてみたい人をゲストに呼んでほしいということで、水上さんに声をかけさせていただきました。

僕はもともと文芸批評を学んできた人間で、近年はシスヘテロの男性として、その枠組みの中からどうやって批評とジェンダー、批評と男性性について考えるかということをテーマにしてきました。最近では著名な文芸批評家の渡部直己によるひどいハラスメントがあったり、アートや映画や演劇など様々な領域で「批評家」と呼ばれる人たちがハラスメントや性暴力を振るってきたことが明るみに出されてきた。MeToo運動などの潮流があって、それらが1つ1つ告発されてきたわけですけれども、そもそも、日本の文芸批評という制度や慣習がとても男性中心的であり続けてきた、という厳然たる社会的事実があるわけです。これは水上さんが責任編集された雑誌『文藝』の批評特集ともリンクする話です。

その場合、最近気になるのは次のようなことです。日本の文芸批評の伝統というか王道とされてきたものは、まず外部としての絶対的な作品、テクストというものを立てて、そこに孤独に対峙すると。で、作品をひたすら熟読していって、自分の小賢しい解釈もどんどん消していって、小林秀雄が言う「無私への道」へと至ろうとする。無私としてテクストに向き合うこと、それが本当の意味で批評的に作品を読むことだし、そうした読み方はそのまま倫理的な生き方に繋がるはずだと。そういう風に考えてきたわけです、日本の近現代の文芸批評の王道では。ある意味ではそれは、武士道とか武道みたいな、ある種の「批評道」として存在してきた。人生の「道」を極めるということですね。

小林秀雄のみならず、たとえば伊藤仁斎や本居宣長などにも遡るような、そうした批評道という伝統が連綿とあって、あたかもそこでは、性別やジェンダーが全く関係ないかのように見なされてきた。つまり、性別や階級は関係なく、誰もが同じ「無私」の「道」に至れるはずだと。そういう前提がどうやらあった。実際にそうした考え方に

みずかみ　あや，Aya MIZUKAMI：文筆家　すぎた　しゅんすけ，Shunsuke SUGITA：批評家

よって、近年のフェミニズム批評やクィア批評を批判する文芸評論家は、今もまだ結構いるんです。これって一体何なんだろう、というのが気になっていました。

他方で男性学ということで言うと、1990年代ぐらいから日本にも男性学というものの歴史があって、市民講座などがあちこちで開かれるくらいになった。その後しばらく低迷していたんですが、最近はまたジェンダー運動やフェミニズムの興隆を受けて、「男性学ルネッサンス」みたいな流れもあって、男性学的な問題意識が拡がりつつはあるんですけれども――それはやっぱり男性の物の考え方や生き方を反省するというか、男性の人生道みたいな傾向が強い気がするんです。

そうすると文芸批評の批評道という姿勢と、男性学で男性たちが自分の生き方を振り返って、男らしさの呪縛を捨てて、男性特権も捨てて、自分らしさを発見していく、という姿勢とがけっこう共鳴してしまうというか、重なり合ってしまうようなところがある。でも、ほんとにそれでいいのかな、これでいいのか、という違和感がまず根本にあった。とはいえ他方で、外部としてのテクスト、他者としての作品に向き合って、自分たちのあり方を内省していくという姿勢の全てが男性特権的であり、ホモソーシャルであり、家父長的なのかというと、それもちょっと違うんじゃないか。少なくとも、それとは違う可能性が批評という営みの中にはあり続けてきたんじゃないか。たとえば小林秀雄にせよ江藤淳にせよ。そういう気持ちもあるんですね。

水上さんも、クィア批評やフェミニズム批評を読むと共に、江藤淳や加藤典洋、柄谷行人も読んできたわけですよね。とすれば、日本の伝統的な文芸批評の歴史の中にも、男性中心的でホモソーシャルな方向に陥るのではないような別の批評の形、批評の姿勢があるということなのでしょうか。その辺りのことを聞いてみたいと思いました。日本的な文芸批評とフェミニズム批評やクィア批評との関係を、シスヘテロという自分の立場からどう考えていけるか。その辺をぐるぐる考えているんですけれど、とても自分だけでは考え尽くせるとは思えない。自分だけで考えるとすごく間違えそうな気もしている。ので、なるべく色々な方に批判的に突っ込みを入れてもらったりしながら考えていきたい、考え続けていこうと。僕の側の思いとしてはそういう気持ちがあります。ひとまずそういう問題意識から水上さんと話してみたいと思ったということです。

水上：ありがとうございます。今、杉田さんからお話があったとおり、文芸批評の問題というのがまずあって。私は、一昨年くらいから文芸誌や商業誌で原稿を書かせていただくようになって、文芸批評だとか書評だとか、文学と批評に関わる仕事をいろいろさせていただいているんですけれども、その前に大学院で文学をやっていたことがあって。

そこで文芸批評も自分なりに読んだり、やろうとしたりしていたことがあるんですけれども、いろんなもやもやとしたものを感じていたんです。結局大学院を卒業した後、文学からは離れて、しばらくブログとか同人誌とかで、映画とかアニメとかについて書いていました。で、ひょんなことで編集者の方に声をかけていただくようになって、今は再び文学をやっています。

もう一度文芸批評を自分がやっていこうって思った時に、自分が過去に感じていたもやもやを思い出したり、改めて自分が文芸批評というフィールドに入った時にいろんなことを感じたりしました。それは結局、文芸批評が90％以上男性によって行われていて、歴史的にも男性中心だった、というところに起因するものだと思ったんです。男性中心の歴史が、どういう形で文芸批評を規定していたのか。自分がどのようにそこに違和感を感じて、あるいは排除されていると感じてきたのかという問題について考えさせられました。今年の1月に出た『文藝』という文芸誌の批評特集を、瀬戸夏子さんと共に、私が共同編集・責任編集でやらせていただいたんですけれども、その時に杉田さんにお声がけさせていただいて。

杉田さんも違う立場ではありますが、文芸批評と男性性の問題を考えていらっしゃって、ご寄稿いただいて、今回もお話しさせていただくことになったので、まず文芸批評と男性性みたいなところからお話しさせていただければと思うんです。

杉田さんが先ほどおっしゃったように、「無私の道」とでも言うべき伝統が文芸批評にはあると私も思います。自分ではないところに至れるのが批評だというような態度ですね。あるいは、自分がどこから発言しているのか、という立場性を度外視する。その度外視を正当化するような形で、文芸批評はつくられてきたんじゃないか。レジュメで杉田さんが私の言葉を引用してくださっています。何の偏見や型にも当てはめず、徒手空拳で作品と向き合うことこそが批評なんだっていわれてきたけど、でも透明な、自分を透明にすることこそが、ある種の歴史的な男性性と関わっているのではないか、ということですね。

杉田さんが非モテの本の中で、自分の弱さを認められないっていうのが男性の弱さだみたいなお話しされてたじゃないですか。それはつまり、自分の輪郭が分からない。自分がどういう存在なのか、そもそも認識できない、ということなのではないかと思います。ある種の男性性の問題としての「無私」です。ですから、文芸批評が男性中心だったということは、メンバーが単純に男性ばかりだったということのみならず、今、文芸批評と考えられているものそれ自体に男性的なものが含まれているのではないか。こうした問題意識がありました。なので、これまでは批評と思われてなかったものとかも批評として再定義したい、取りこぼされてきたものを拾いたい、ということが、この『文藝』の特集のモチベーションだったんです。

杉田：つまり慣習とか制度の問題として、実際に有名な批評家とか、文芸誌に出てくる批評家が男性ばっかりだったという、最近はずいぶん変わったとはいえ、そういう現実的な問題がずっとあったわけです。たとえば女性は長い評論を書かせてもらえなくて、書評とか解説ならいいよ、みたいなジェンダー上の棲み分けもあったらしい。そういう中でたとえば斎藤美奈子さんや豊崎由美さんたちが、書評や文庫解説の中に独特の非男性的な批評のスタイルを作ってきた、という先駆的な営みがあったりもする。しかしその上で、そもそもそういう棲み分けが慣習的に歴史的に機能してきてしまったということは、日本の文芸批評にはどこか無自覚なマッチョさというか、男性中心性があったのではないか。それこそ無意識の構造的問題として。

たとえば最近のジェンダー批評やフェミニズム批評に対して、ある男性批評家が、それは「アングル」（意匠）にすぎない、あるいはイデオロギー的な批評にすぎない、ということを言っていたんですね。それに対して、本物の批評ってものは、アングルやイデオロギーじゃなくて真の人間性とか、真の感情とか、真理を表現するものなんだと。そういうことを言っていた。なんだかその言い方が、漢意を排除して真心を語ろうとした本居宣長などの国学的な系譜に似ているなと思ったんです。漢意としてのイデオロギーやフェミニズムを排さねば、みたいな。そうした流れが日本の近現代の文芸批評の中にもひそかに流れ込んでいるのではないか。割と無自覚に再生産するような形で。

日本的な文芸批評の方法上の問題と、制度的で慣習的な歴史性の問題と、両方が絡み合っていて、だからこそ厄介なのではないかと。もちろん最近の文芸誌はずいぶん風向きが変わったとは思うんですけれど、その辺り、いかがでしょうか。

水上：今おっしゃってくださったように、実際文芸誌だったり、『ユリイカ』とか『現代思想』とか論考を載せるような文芸誌以外の雑誌のメンバーを見ても、これまではピックアップされなかったような人たちにスポットライトが当たるようになったことは事実だと思います。だからこそ私も出てこられたわけですし。ただそれと同時に、バックラッシュも起きていると思います。現

状に対して、自分たちが信じてきたものとは違う、と感じている人がいる。先ほどの杉田さんのお話でいうと、「からごころ」がすごく侵略していて、「からごころ」に文芸誌が乗っ取られてるぐらいの感じで語っていらっしゃる年配の――年配とは限らないんですけれども――の方々もすごく多いのかな、と。

バックラッシュはたとえば、いわゆる「ポリコレ」、政治的正しさによっては文学は測れません、などという言い方で表現されている。文学だけではなくアニメや映画やいろんなフィクションに対していわれていることなんですけれども。ポリティカル・コレクトネスに対する斜に構えた揶揄や、あるいはアレルギー反応とでも言えるような劇的な反応も、増えていることを感じています。

もちろんまだ全然足りない部分はあるんですけれども、多様な書き手が出ていること自体が、ネガティブな意味での「アイデンティティ・ポリティクス」と受け取られているんでしょうね。書かれている内容じゃなくて誰が書いているのか、どんな属性のどんな立場性の人が書いているのかっていう問題にのみ焦点が当たり、テキスト自体が読まれていない、という判断です。属性に還元されて受け取られ、本当の意味で望ましい読み方、望ましい書かれ方が今はされていないという主張。「アイデンティティ・ポリティクス」に対する嫌悪感が特に文学では出ているのかなと思います。立場性への自覚を促す議論への嫌悪感それ自体は、文学に限ったものではありません。ただ、文学領域における「アイデンティティ・ポリティクス」への嫌悪感は、日本文学の世界で「文学」がどのようにイメージされてきたのかという問題と関わっていると思います。たとえば文学とは属性や立場性や人に還元されない、それ自体として独立した価値を持つ何かだというようなイメージです。それはもしかしたら、先ほど杉田さんがおっしゃってくださった国学的なものの系譜にも通じているのかな、と今思いました。

杉田：僕も含めてなんですけど、現在のフェミニズム批評、ジェンダー批評、クィア批評がどういう議論を展開しているのか、あまり知らない人も会場には多いと思います。もちろん簡単に全体の地図を描ける感じでもないとは思うんですが、どういうところが今1番面白いと感じていらっしゃいますか。

水上：はい。私は学者ではないですし、アカデミアにも関わっていないので、実際、学問分野で理論としてフェミニズム理論、あるいはクィア理論が最先端でどういう研究をされていて、どういう議論をされているのか、という点については私には語ることができません。なので、あくまで私の中で見た私にとっての面白さとしてお話しさせていただければと思います。まずフェミニズム批評とクィア批評、という言葉だけで言うと、それぞれ独立した別個のジャンルがあるように感じられますよね。いろんな解釈があると思いますが、私にとってはこの2つは完全に分けられるものではありません。

フェミニズム批評、フェミニズムと呼ばれるものは、基本的には女性の経験や、女性に対する抑圧だったり差別だったりを扱うものだと言えると思います。他方でクィア理論は、性的マイノリティの運動から生まれた理論です。異性愛規範だったり、シスジェンダー規範だったり、性的なマジョリティの規範に対する介入だったり、そういったものとしてクィア批評はある、と、ひとまず言うことができる。ただ、そもそも「女性」とは何なのか、セクシュアリティとは何なのか、突き詰めて考えだすと、一方に「女性」に関するフェミニズムがあって、他方に「性的マイノリティ」に関するクィア理論があって、というように2つの領域で完全に分かれて存在できるはずがないですよね。女性とは何か、という問題を考える際には当然、この社会が男性と女性にまず人間を分類している事実を考えなければならない。しかも分類してるだけではなくて、片方をより優遇するような社会構造だったり、片方をより軽んじるような社会構造だったりになってる。そういう

性別二元論の問題が、女性とは何かを考える時に絶対出てくると思います。この意味で性差別と性別二元論は切り離しえない。

では性別二元論とは何なのかといえば、異性愛規範、同性愛を含む非異性愛への差別とも深く関わっているわけです。異性愛規範とは、性別を2つに分けた時に、この2つの間でのみ、この2つの間にしか性的な関係、性欲だったり恋愛関係だったりが存在しない、という前提のことです。そして性別二元論が異性愛規範を生み出すと同時に、異性愛規範が男性と女性という枠組みを維持してもいる。こうしたことを考えていくと、セクシュアリティとジェンダーをまったく別個のものとして考えることなどできませんよね。性差別、異性愛規範、性別二元論、シスジェンダー規範、いろんなものが1つの大きな構造の中に入っている。大きな構造から出ているものであって、ここからここまではフェミニズムで、ここからここまではクィア理論で考えるべき領域ですよ、みたいに分けられるものではない。少なくとも私自身の経験だったり、私自身の考えだったりの中では、そんなにきれいに分かれるはずがないと思っています。私は、クィア・フェミニズム批評って今回のイベントのタイトルにも書かせていただいたんですけれども、そうやって書かせていただいてるのも、一方だけでは何も語れないっていう実感があるからかなと思ってます。というのがまず1点目です。

2点目に、どういうところが面白いのかというお話をさせていただきますと、やっぱり自分が生きているこの社会、自分がこういうふうに存在させられている構造、させられている理由というか条件について、自分の解像度を上げていくことができることかなと思います。フェミニズムやクィア理論に触れなければ、こういうものだって受け入れて生きていくしかないようなことを、距離を取って考えることができる。分析的に考えることができるというのは、つまり何かしら変わる可能性があるということです。それが私にとっては面白いというか、自分にとってこれらが重要であり続けている理由の根本だと思います。具体的に今、最先端の理論はこれですとか、今これがすごくホットなトピックです、みたいなのを私がご紹介することは難しいんですけれども、これから関心をもってフェミニズムやクィア理論に触れる方も同じような面白さを感じていただけたらな、とは思っています。

杉田：切り離せなさ、っていうことですよね。フェミニズム批評とクィア批評は、別の領域としてあるんだけど、切り離すこともできない。そういうことが重要なのかな、という風に今のお話を受け止めました。例えばカイラ・シュラーという人がホワイト・フェミニズムを批判した本が最近翻訳されました。そこではフェミニズムの歴史がラディカル・フェミニズムvs交差的フェミニズムという形で記述されていく。白人中心の、女性属性を中心としたフェミニズムと、障害や民族などの交差性を抱えた人々のフェミニズムの歴史を、ある種の抗争史として記述している。とはいえ、そこではやっぱり切り離せなさが前提とされていたと思うんです。

たとえば「トランス・フェミニズム」という言葉を僕は最初、遠藤まめたさんにインタビューしたときに知ったんですけれども、トランスジェンダー理論とフェミニズム理論は、もちろん違いや差異があってそのまま全部一致させることはできないんだけど、しかしやっぱり両者を切り離すこともできない、みたいな。影響関係の歴史の中で互いに育ってきたのであって。そういうことなんだろうなと受け止めました。

そのうえでしかし、シスヘテロの「男」たちはどうやってフェミニズムやクィア理論、トランスジェンダー理論に関係したり、コミットしたりすればいいのか、ということをやはり考えてしまうんですね。例えば僕のような立場の人間が「インターセクショナルな男性学」と簡単に言ってしまっていいものか。

いったんシスヘテロでマジョリティの「男」という存在を前提にして、それを引き受けないと、

男性特権とか性差別の構造を十全に問えないのではないか。一方ではそう思うんです。そこは背負わなければならない。しかし他方では、男性学のスタート地点をそのように狭く限定してしまうと、ゲイ男性とか、障害者男性とか、トランス男性とか、多種多様な男性たちの経験を排除してしまう。じゃあどうすればいいのか、というところでいつもぐるぐる考えてしまう。交差的な男性学を主張してもいいんじゃないかという気持ちがありつつ、やっぱりそこには線を引かなければいけないような気もしていて。

水上：ありがとうございます。今お話しいただいたことの中には、交差性と男性学をどう考えるのかっていうところと、『ホワイト・フェミニズムを解体する』に関するフェミニズムの中のインターセクショナリティというところの、2点があったと思うんですけれども。その2点とともに、レジュメの中で杉田さんが書かれていたお話についても触れさせていただければと思います。杉田さんは『対抗言論』3号で、「トランスジェンダー／フェミニズム／メンズリブ」という論考を書かれていて、それに対して私がSNSで反応したんですね。レジュメではその私の反応について、改めて杉田さんが取り上げてくださっています。このことと今のお話は関わっていると思うので、その3点についてお話しできればと思います。

まず交差性の話に関わると思うんですけれども、杉田さんの論考や今のお話を伺っていて思ったのは、抽象的な話になりすぎているような気がするということです。先に私が切り離せないっていう話をしていたのは、実際に、現実だったり1人の人間だったりを見ていると、普通に抽象化して、これとこれが交差していてみたいなふうに語ることもできないのかなと思うからです。

例えば杉田さんの論考の中では、このレジュメにも書いてくださっているんですけれども、「フェミニズムという理論と実践の中にトランスジェンダーの理論と実践を回収するべきではない」っていうお話をされていますよね。論考の中で、フェミニズムの、特にラディカル・フェミニズムの「魂」について、それは男性対女性という二項対立をもとにした、ある種の男性に対する怒りだと書かれている。その「魂」は大事なものだけど、結局二元論的なところにならざるを得ないから、臨界点として、回収できない点としてトランスジェンダー理論があるんじゃないか、と杉田さんは書かれていました。私がそれを読んだ時にちょっと違和感を感じたのは、そこで言われてる「フェミニズム」や「トランスジェンダー理論」は何なのかっていうのが、読んでいてよく分からなかったんです。その言葉が本当に指してるものが何なのかが分からなかった、という理由でSNSで反応しました。

例えばフェミニズムの歴史を見ると、トランスジェンダー、ノンバイナリーなどの言葉がなかった、あるいは未だあまり一般的に広まっていなかった時代だったとしても、自分は女性と見なされるような形で生まれたけれども女性ではないと感じている、男性というアイデンティティを持っている人たちは現にたくさんいるんです。フェミニズム理論や運動の中には、最近の話ではなくて最初からずっと「女性ではない人たち」がいました。フェミニズムはもちろん、男性と女性を区別して片方を軽んじて差別する社会に対する怒り、男性一般に対する怒りみたいなところが稼働力になっていた部分っていうのは絶対にあると思うんですけれども、それだけではない。じゃあそもそも男性とか女性とは何なのか。女性とは誰なのか。女性の「本質」があるとしたらそれは何なのか。あるいは「本質」なんてあるのか、みたいな話は散々していたはずで、それが権力構造としてのジェンダー分析、ないしはジェンダー概念自体の発明にも結びついていた部分は実際にあると思います。

要するに今だったらもしかしたらノンバイナリー、あるいはトランス男性だったり、トランスマスキュリンにアイデンティファイしていたかもしれない人たちは、現実にたくさんいるんです。そういう人たちが、フェミニズムの理論や運動の

中で「女性」たちと共にやってきたという事実は確実にあります。

そうした事実をふまえると、フェミニズムの臨界点としてのトランスジェンダー、という言い方をすることで見落とされてしまう物事や抽象化されてそぎ落とされてしまう現実があるのではないか。このことはフェミニズムの中のインターセクショナリティの話でもあると同時に、概念と現実の理解にまつわる話でもあると思います。

たとえば、『トランスジェンダー入門』っていう最近出た新書の中で、トランスジェンダーの定義について説明されていますね。そこでは、社会が私たちに負わせている、性別をめぐる二つの課題について語られています。

1つは生まれた時に割り当てられた性別をずっとやってください、たとえば男の子なら、あなたは男の子だからずっと死ぬまで男の子をやってくださいっていう課題。もう1つは、男の子らしくやってください、その性別らしくやってくださいっていう課題。本の中では、トランスジェンダーというのは1つ目の課題を背負いきれなかった人たちです、と説明されています。トランスの人たちについて、しばしば2つ目の課題、つまり「らしさ」の問題だと誤解してしまうシスジェンダーの女性がいますが、その誤解をわかりやすく解く説明です。つまり、シスジェンダーの女性で「女らしくしなさい」に抵抗を感じる人々は、ジェンダー規範は嫌だけど、自分が女性ではあることは受け入れている状態で、1つ目の課題はクリアしてるけど、2つ目の課題はクリアできていない状態です。なので、特にシスジェンダーの女性のフェミニストが問題にしているジェンダー規範の抑圧と、トランスの人たちの性別違和は違いますよ、ということですね。この説明はすごく分かりやすいし、優れた説明だと思います。シスの人たちの経験にトランスの人たちの経験を還元してしまってはいけない、ということは大前提です。

ただ現実には、常にあらゆる人にとって2つの課題の境目が自明だったわけでもないと思います。自分の違和感だったり、息苦しさだったりがどこから生じているのかというところが、過去のフェミニストとしてやってきた人たちの中で、明確に分けられていたわけではなかったかもしれなくて。つまりフェミニズムの中には、その性別をやってくださいっていうこと自体が嫌だ、その性別をやってくださいということを課してくる社会、それ自体に対して問いかけていた人たち、理論をつくっていった、運動をつくっていった、2つの課題に分けられない形でジェンダーについて思考していた人たちが確実にいます。

そういう歴史を考えると、そこで対立的に語られているフェミニズムとトランスジェンダーとは何を指しているのか、まず分かりませんでした。長くなっちゃったんですけど。

さらに歴史や実際にどんな人たちがいたか、という話だけじゃなくて、一言でフェミニズムとかトランスジェンダーとか言っても色んな状況の人がいますよね。例えばフェミニズムを、社会が「女性」に対して行う抑圧や差別に対して反対する運動、それに抵抗する人たちが主体の運動、理論、実践だと考えた時に、抑圧と運動を担う主体のアイデンティティは必ずしも連動しません。社会は別に、その人のアイデンティティが「女性」かどうかを確認してから抑圧するわけではないですよね。自分のアイデンティティは「女性」ではない、たとえばノンバイナリーだったりトランス男性だったりする人たちでも、社会的に「女性」として存在させられてしまっていて、「女性」として性差別を受けている人たちがいます。言うまでもないことですが、トランスの女性も、女性として性差別を受けることなんて当たり前にたくさんあります。だから実践のレベルでも、当事者性のレベルでも、「フェミニズムとトランスジェンダー」を完全に別個のものであるかのように語られてることに、私は強い違和感を覚えました。

だから交差性と言った時に、何がどんなふうに交差しているだろうとか、どんなふうにこの理論とこの理論が交わるだろうとか、抽象的なレベルで考えていっても仕方ない、と私は思うんです。

現実に、ある1人の人間を掘り下げるだけで、普通にもう既に交差している。その上で、理論や具体的な運動を作っていくなかで取りこぼされてしまうのをいかに防ぐか、という話じゃないかと。あんまりちゃんとした応答になってないかもしれないんですけれども、男性学、メンズリブの中で交差性みたいなのが難しいということは決してないんじゃないのかなというのが、私の感想です。すいません。長くなって。

杉田：最初の前提として、僕が『対抗言論』3号に書いたのは、小説家の笙野頼子氏のトランスフォビア的な発言について、ラディカル・フェミニストとトランスジェンダー当事者やそのアライの人たちの「対立」がある、という話がSNSなどで広がった時に、そのことの是非を論じる手前で、「男」たちはどこにいるんだろう、っていうことが気になったんですね。シスヘテロ男性たちのことですね。自分たちのことを全く問わないで「トランスジェンダー問題」にいっちょ噛みしてみたり、「議論」や「論争」が大事だと煽ってみたり。かといって、そうした男性たちはアライという立場に立つことで——もちろんひとまずそれが何より大事ではあるのですが——それで終わりでいいのかな、って、個人的にどうも腑に落ちない部分があったんですね。その前提で、トランスジェンダーとフェミニズムとメンズリブ、という三つ組で問いを立ててみた。

それで、水上さんの疑問を正確に僕が受け取れているかわからないんですが、自分なりに咀嚼して、こういうことなのかなと思いました。例えば、「理論と実践」を二元的に切り分ける前の、「この私」の具体性みたいな次元があって、やっぱりそこから出発した方がいいんじゃないかと。抽象化された理論——例えば「フェミニズム」とは何か、「ラディカル・フェミニズム」とは何か、「トランスジェンダー理論」とは何か、というようなところではなく、個人の生活や身体、あるいは人生に受肉された個別性。そういうものがまず最初にあって、その個別性についての解像度を上げて、顕微鏡的に見ていくと、「交差的な私」と呼ぶべきものが誰の中からも出てくる。その限りでは、フェミニズムという理論よりも、フェミニズムを必要とした個別の人生、あるいは生き方がまずは大事なのではないか。

それはたぶん、ある意味では、先ほどの日本文芸批評の伝統的な考え方——イデオロギーやアングルによっては切り取れない「私」の固有性が大事であるとする——にも似て来る側面があるかもしれない。つまり一般的な理論やイデオロギーで何かを切ったり、誰かを評価したりすること自体が間違っていて、そのように解釈してはいけないと。そうした批評道的なイデオロギー批判の先に、本当の意味で豊饒で複雑な「私」が見出されると。そういう話と半分は似ていると思ったんです。ただ、半分は似ていて、もう半分が決定的に違うと思うのは、批評道的な「私」っていうのは、突き詰めるとやっぱり宮本武蔵が達人になって天地と1つになるみたいな、そういう達人技的な方向へ行きがちだと思うんです。しかしやはりそれはそれで、複雑性が消えてしまうし、具体性がないし、交差性もない。そんなことを思いました。

水上：ありがとうございます。今お話を伺っていて納得する部分と若干違和感を覚えた部分があって、まだちょっと違和感がうまく言語化しきれてないところがあるんですけれども。先ほどの批評道とある意味似てるんじゃないかというご指摘、半分似ていて半分違うっていうふうにおっしゃっていただいたんですけれども、どの辺が似ているのかっていうところに対するまだちょっと腑に落ちない気持ちが多分あって。

なぜかというと、結局日本の文芸批評の無私の私にたどり着く、イデオロギーを廃していろんな偏見や型に当てはめず、みたいな話をしている日本の文芸批評って、表面的には私を廃しているっていう形に見えるんですけれども、廃しているように見えて全く廃していないというのが私の感想だったんです。自分は何の偏見にも型にも当ては

めていませんっていいながら、めちゃめちゃ当てはめていることに無自覚であるように私には見えていて。

結局のところ無私を語りながら私性は消えていないにもかかわらず、その私性の消えていなさみたいなものが何らかの形で隠蔽されているという意味で、一層「自意識の球体」だと思うんです。「私」ではないものの話をしながらずっと「私」の話をしているような。私が違和感を覚えていたのは、日本の文芸批評のそういう部分に対してです。そういう部分がある意味、男性性の問題とも結びついているように感じていました。

例えば文学の男性性を考える時に、私は太宰治の『人間失格』を思い浮かべます。『人間失格』って、自分は駄目ですっていう話を延々としているじゃないですか。

自身の内面を赤裸々に語るタイプの物語は「文学」と呼ばれていて、「文学」の一般的に流布している王道的なイメージだと思うんですけれども。王道的なイメージの「文学」って、自分は駄目なんですと言う。ただ、現にその駄目な自分のせいで誰かが犠牲になってるけど、その誰かを犠牲にしてしまう自分がかわいそうなんですっていうところに、また反転するんですよね。例えば『人間失格』って、読んだのがすごく昔なので正確には覚えていないんですけれども、主人公の妻が家に1人でいて、そしたら誰かが侵入してきて性暴力に遭ったと推測できる描写があったと記憶しています。この時、1番被害者で1番傷ついてるのは妻ですよね。けれども『人間失格』では、主人公の男性が妻を傷つけられたことによって傷ついていて、妻よりも自分が傷ついている、自分が苦しい、という話になっていて、強い違和感を覚えた記憶があります。

自分の弱さを考えていく時に、結局誰かが犠牲になっていて、でも誰かが犠牲になっていること自体を考えるのではなくて、そんなふうに誰かを犠牲にしてしまうかわいそうな僕の話になる。全部自分に戻ってきちゃう。それが、私が感じていた文学における男性性です。このことを即座に男性性の問題と言えるのか分からないですけれども、多くは男性が主人公になる物語の中の問題です。そうした「自意識の球体」が文芸批評にも、いろんな場所にあるように感じています。

もちろんそれは別に男性だけの問題ではなくて、自分も含めて「文学」的なものに心惹かれることの中にそういう側面、ある種の「私」に他者を還元していくような側面があるかもしれないとも思います。だとしたら、自分も「自意識の球体」から出たいとは強く思っています。すみません、話がまとまらなくなっちゃったんですけど。批評道と自分自身を掘り下げる営みに共通する部分と、その類似性に関するご指摘への違和感を考えていくと、結局のところどうしたら「私」に還元しない仕方で他者について考えられるか、という問題になるのかなと思いました。

杉田：難しいですね。『人間失格』だと、主人公はいろいろ弱い人間だけど、最後に女性が全肯定するわけですよね、天使みたいな人だったと。つまり、構造的に、男性の弱さが救済される形になっていて、それ自体がすごくナルシシズム的な感じがする。他方でたとえばバルザックの『ゴリオ爺さん』なんかでは、「自意識の球体」が最後徹底的に打ち砕かれる。そういう救いのなさがあって。

何が言いたいかというと、問いが自分の側に返ってくるときに、どうすればいいのかと。例えばフェミニスト女性の中から内在的にトランスジェンダー差別が出てくる側面があったとしたら、それを内省的に自分事として引き受けることが、フェミニズムという理論にとっての「自意識の球体」から出ることを意味するのではないか。しかしそうした問い方はあまりなされない気がする。むしろ、そこは切断される。つまり、一部の間違ったラディカル・フェミニスト（あるいは男性によるなりすまし）がトランスジェンダー差別をしているだけで、フェミニズムは本来的に絶対そういうものではないんだ、と。

しかし、自分たちが必要性も必然性もあってやっていることが、逆のものに反転していく怖さ

――それを内在的に突き詰めていくことが「自意識の球体」を内省的に批評するということではないでしょうか。そうすることで後続する人々が同じ過ちに陥らないための道をはじめて示せると思う。僕は小林秀雄や柄谷行人が試みていたこともそうしたことだったと思う。もちろんそれ自体が男性主体の特権性やホモソーシャルな慣習を社会的に再生産していく危うさもあるんだけど、そうした内在的で内省的な問いの普遍性の意味は消えないのではないか。フェミニズムやクィア理論をやっている時に、問いが自分たちに返ってくるという怖さを感じたりはしませんか。そういう怖さはあんまりないですか。そこはちょっと違いますか。

水上：うーん。

杉田：自分たちがやっていることが別の暴力の再生産に加担するということを、単にそれは一部の間違った人たちが誤ったフェミニズム理解をしている、フェミニズムにはトランスジェンダー差別なんてありえなくて間違った人たちが暴走してるだけだ、っていう話で切り離す限りは、やっぱり内省は消えてるような気がするんです。どうでしょうか。歴史的に間違ったマルクス主義は「正しいマルクス主義」じゃなかった、というような議論がずっと続いてきたわけです。自分たちの中から差別や暴力が内在的に出て来ること、それを自分事として問い直すのが内省なのではないか。たとえそれが文芸批評であれフェミニズム批評であれクィア批評であれ。でも、それを「男」の側から積極的に主張することはできないので、ある意味では「祈る」ことしかできないんですよ。どうですかね。いつもそこでもやもやするんですけれども。それはどうですか。うまく言えたか分からないですけれど……。

水上：内省を突き詰めるという営みとは何か、という問題ですか。今のお話に関連して言うと、先ほど言及があった『ホワイト・フェミニズムを解体する』は、まさにフェミニズムの名のもとで行われる差別――トランス差別はもちろん――を、それは「本当のフェミニズムではない」と切断するのではなくて、「ホワイト・フェミニズム」と名付けて、つまりあくまでフェミニズムの問題として批判する、という意図のもとに書かれた本です。

という点を確認したうえで、改めてご指摘に戻ると、多分私の話が、「内省」一般を否定しすぎているように聞こえる、ということでしょうか。私には「自意識の球体」的な、自分の内側だけで問題を見ているところの態度につながることへの疑問があって。それに対して杉田さんがおっしゃったのは、例えばフェミニスト自身がフェミニズムの名のもとでどんな暴力を生み出しているのか、という内省が必要になるように、内省それ自体の大切さもあるんじゃないか、っていうお話であってます？

杉田：自分なりの理解では、自意識と内省ってちょっと違う気がするんです。よくいう「自意識の球体」って、私について語る私について私は……みたいな、無限後退の論理だと思うんです。で、そこからは出られないと。そうするとそれは論理的にナルシス的な空間に閉じ込められていく。それに対して内省っていうのは、そうした「自意識の球体」を含めて突き放すことだと思うんです。つまり、自分たちが正しいと思ってやったにも関わらず、関係の絶対性によって、思いもよらずに陥っていく現実的なカラクリみたいなものがあるとして、それをどうやって超えていくか。内省とはそういうことを含むのではないか。

そのためには他者の間違いを批評すると同時に、自分たちが陥っていく暗点そのものをくり返し考えて内省していくという。それは男性だけではないし、もちろんフェミニスト女性だけではなくって、あらゆる人間が強いられた「普遍的」な課題のような気がして。そのような内省において、たとえば「男性学」を受肉した「男」と「フェミニズム」を受肉した「女」――ここは無

限の種類があるわけですが――が出会える、遭遇できるのかもしれない。というかそうした出会いと遭遇こそが「普遍的」なのではないか。そうした意味での普遍性がなくなってしまうと、敵陣営と味方陣営を分けて、自分たちは正しいけど、あいつらは間違ったフェミニストだ、間違った解釈をしているという、敵味方のポリティクスに無限に絡め取られていく気がして。同時にそれは内ゲバの論理というか、「間違った味方」を無限に排除する論理にも陥りかねないと。さっきのカイラ・シュラーの本も白人中心フェミニズムvs交差的なフェミニズムという敵味方の構図になっている気がして、そこはちょっと気になったんですね。どうですかね。うまく言えてないかな。

片上：そろそろ時間なので、いったん閉じる方向でお願いできますか。

水上：はい。今日、杉田さんとのお話では、まず日本の文芸批評と男性性に関する問題があり、そこから「内省」という部分についていろいろお話しさせていただいていたと思います。杉田さんのお話はおそらく、問題のある自意識に全てが絡め取られていくようなタイプの思考回路、道筋と、そうではない内省、よりよい道に――よりよいっていう言い方も単純なんですけれども――ただ自分に絡め取られていくだけではない形の内省を区別して、後者は必要な営みなんじゃないかっていうご指摘だったと思います。

その区別を考える時に、例えば『人間失格』と、あるいはフェミニズムの中のトランス排除っていう2つの具体例が出てきました。自意識に、私の問題に全てが絡め取られていくという問題は、結局自分の暴力性に対する無自覚さであり、自分自身に対する肯定です。かわいそうな私を肯定する、かわいそうな私が誰かに肯定されるっていう構造になっている。一方、内省という形で行われる思考の道筋では、自分の中の暴力性、自分が行いうる加害性に対して、自分を掘り下げていくことによって、その加害性に突き当たり、対処する道筋を与えるようなものだとお考えになってるのかなと思いました。時間が足りず、この区別に関してさらに議論することはできないのですが、私もそれはすごく大事なことだと思います。私自身、今後も「自意識の球体」に陥らない「内省」としての文芸批評、あるいはフェミニズム・クィア批評を考えていきたいなと思います。ありがとうございました。

杉田：それぞれ異なる立場、異なる人間が理解し合う必要はなくて、誤解し合うぐらいで十分だと思っています。僕がどこまで水上さんの問いを受け止めきれているのか、分からない部分もあるんですが、ただ、今日は自分の中で1つ発見がありました。つまり、個別性や具体性においてこそ交差的な私が見出されるんだ、もともとそういうものなんだ、というようなところ。切り離せないんだというところ。批評の言葉が迫るべきなのはそういうところなんでしょうね。

それと付け加えると、批評というのはもちろんすごく広い概念で、たとえば本居宣長や小林秀雄、江藤淳のようなラインだけが批評ではないし、批評が必ず内省的であるべきだというわけでもない。この辺は最初に自己限定しつつ語るべきでしたが、断りを入れるのを忘れていました、すいません。

片上：ありがとうございました。ではここからは質疑応答に移りたいと思います。まだお2人も多分話し足りないというか、ある種、対話の始まりにようやく差しかかったような気がするので、皆さんのいろんなコメント含めて、お2人にこの後も対話を進めていただけたらと思います。今ちょうど質問が来ましたね。

水上：質問をいただきました。読み上げます。「水上さんのお話の中で、男性は自分の輪郭が分からない、それは男性性と関わっていると言われたことに関して、それは身体性と関わっていると考えられますか？身体性とは、例えば男性は生理

がない、妊娠しないなどのことによって、自己の人格を認識しづらいのかなと思ったのですが、いかがでしょうか？」という質問をいただきました。お2人にということなので、まずは私から回答させていただきます。

私は男性ではないので、男性性、男性である人の考える男性性と身体性の問題は分からないんですけれども。ただその見解は、女性、女性性と身体性を強く結びつける言説から生じているものと表裏一体であるように感じます。女性は生理があるとか、妊娠する可能性があるだとかによって、女性性と身体性は現にしばしば結びつけられてきました。

個人的な感覚でいうと、私個人としては、正直意味が分からなくて。生理があるとかないとかって、つまりお腹が痛くなったりとか、時期によって自分の体に異変が生じる、異変っていうか、痛みだったり流血だったりが生じるっていうことですよね。でも別に、お腹が減ったら誰でも空腹を感じるとか、怪我をしたら痛いだとか、トイレに行きたくなったらトイレ行きたいとか、自分の身体性を感じる現象は他にもたくさんあります。どうしてそんなに生理だけが、特別に身体を意識させられるものだと考えられているのか。

日常的な身体感覚は様々にある一方で、生理だけが特別なもので、自分の身体感覚と結びつくという前提で、そういう理屈が語られているような気が私はしていて。個人的には意味が分からないというか、なぜそんなに特別視しているのかと思います。正直、私は感覚として理解できない。私は生理によって自己の身体性を感じていると思ったことは全くないので、よく分からないなと。ある特定の、例えば女性によくあるとされる機能、男性によくあるとされる機能によって、身体性とその属性の人の感じる自己が結びついてないとは言わないんですけども、結びつけ過ぎるのも話を単純化してしまうように思います。なので、男性が自己の輪郭を意識し得ていないとしても、それは生理のような特定の現象の欠如から生じているというより、もっと別の問題なのではないかと。

杉田：一般的なことは分かんないですけど、僕はやっぱり最終的に自分は身体をちゃんとケアしてこなかったなとか、ちゃんと身体を大事にしてこなかったなっていうのはすごい感じるんです。それがどこまで男性問題なのか分かんないんですけど、僕はよく言ってるんですけど、いわゆる醜貌恐怖症というか、醜形恐怖症があるんです。自分の顔が鏡で見られないっていうのがずっとあって、いまだにそれを克服できてないんですけど、それが象徴するような自分の肉体をちゃんとメンテナンスして、ちゃんと向き合ってっていう時間をすごく取ってこなかったというか、無視している気がして。聞くと結構男性、僕と同じようにおじさんたちの中に似たような感覚を持っている人たちも多いようだから、それがどこまで男性の歴史的、社会的に強いられてるものなのか分かんないですけど、その辺は今考えてますね。おじさんたちの、年老いてぼろぼろになって弱っていく体にちゃんと向き合いたいというのがちょっとあって、それを無視して、マッチョで健康で健全な身体みたいなのに憧れるっていうのは、ちょっと危ういなと思ってるので、今はそういうことを考えたりはしてます。

……続いて、他の方の質問を読み上げると――「何で杉田さんはラディカル・フェミニズムとトランスジェンダーの対立に、男性としての立場を明らかにする必要があると考えるのでしょうか。立場が不透明だと、本日の話で出た無私、私の無い批評になってしまうからでしょうか？」

これはすごく素朴な話で、どうしても他人事のように語ってるなって気がしたんです、男の人たちが。というか、僕自身が。それがちょっと嫌だったんです。だから正直な気持ちを言うと、アライ的な立場にもうまく乗れなかったというか。全く自分を問うことなく、どちらかの立場や陣営につける、という風になってしまう気がして。だから一度は「男」の立場、シスヘテロの男性の立場から問いを考えていくと。そういうことをしなきゃと思ったんですね。そういう感じですね。

水上：「お 2 人の中で今回の問題を考える上で重要な文学作品、ドラマやアニメ、その他のフィクションがあれば教えていただきたいです（太宰の話が面白かったので）。」というご質問をいただきました。

杉田：今回の話ってことですよね。

水上：太宰の『人間失格』に見いだした問題とすごくよく似ているなと思っている小説で、有名な小説といえば、私が思い浮かぶのは『罪と罰』ですね。『罪と罰』の主人公にはお母さんと妹がいて、仕送りしてもらって勉強してるんですけど、彼は長男として大きな期待をかけられていて。妹は非常に賢い女性なのですが、兄の学費を捻出するためにどうしようもない男と結婚しようとしたりしています。そういう、みんなが自分のために何かしてくれているっていうことに対するプレッシャーに対して、主人公はある種傷ついていると思うんですね。そしてそんな彼の屈託が、エリート主義としての殺人にまで至るようなねじれになっていく。このことは、今日お話ししていた文芸批評と男性性というか、文学における自意識の問題をよく表している気がします。全てが私の問題になっていく、かわいそうな私の話に全部なっていってしまうという問題の、1 番分かりやすくて 1 番有名な文学作品だと私は個人的に思っています。

杉田：ピクサーの映画なんてどうでしょうか。たとえば『トイ・ストーリー』シリーズは、資本主義社会の中で時代遅れになり、排除され廃棄されていくような、そういう男性たちの葛藤を描いています。あるいは『ファインディング・ニモ』は、父子家庭の話で、しかもニモが障害児なんですよね。片ひれが小さいっていう障害があって。それに対して父親が過剰に依存してしまって、過剰にケアすることでむしろ抑圧している。そういう状態からどうやって互いが自立していくか、関係を作り直せるか、という話なんですね。男性学的な主題については多分ディズニーアニメよりもピクサーの方が先に行っている感じがします。

水上：Zoom のほうで「一部の人が批評の敗北を謳う中で、お 2 人は批評のポジティブな可能性をどの辺りに見ていらっしゃいますか？またもし仮にそのための具体的なアプローチを予定されているようでしたら、お話しいただけますと幸いです」っていうご質問をいただいています。関連してるかなと思うんですけれども、また別の方から私に対して、「クィアや女性の立場を低めるような社会構図は現実にあると思いますが、とりわけ文学や映画などの表象に対して、クィア・フェミニズム批評をすることの可能性について伺いたいです」という質問をいただいております。いずれにしても批評の可能性、ポジティブな可能性をどこに見るのかっていうお話だと思うんですけれども。

まず確認したいのは、私たちは表象の中で、表象によって形作られているという事実です。映画であったり文学であったり、何らかの表象と完全に無縁で人生をずっと過ごすことはできません。それは私たちが、自分をどう理解するか、どう語るかという問題と密接に関わっています。ならば社会で生み出されてる物語がどういうもので、どういう形で何がそこに存在していて、どんな形で受け入れられているかということは、私たちの人生に必ず関わってきますし、この社会がどういうものなのかを考えるヒントにもなります。社会と個人の間をつなぐ不可欠な存在としての表象について、誰か特権的な人が批評しているだけではなくて、開かれた形で批評する、みんなで考えていくきっかけづくりをできないかな、というのが、私の今思っているところです。

今までの批評は、特権的な人がいて、その人が優れた読みをして、評価を決めていくものとしてイメージされていたように思うのですけれども、そうではないはずです。本来であれば、何かの物語、表象を受け取るには、受け手の側がまず開かれなければならない。自分の中にあらかじめある

何ものかをただ当てはめるということでは、本当の意味では受け取れないはずです。社会と自分の距離感を考えたり、どういうふうに自分が他者の声を聞けるか、物語を受け取れるかっていうのを考えたりすることが、批評の前段階として不可欠だと思います。前段階のところから多くの人に共有できる形で批評を実践する方法を模索すること、そのきっかけづくりを行うことで、変わるものがあるかもしれない。自分を物語る、他者の物語を聴く仕方が変わるかもしれない。批評のポジティブな可能性として私が考えているのはそんなところです。できる範囲で、私にできることをしたいなという気持ちでやっております。

杉田：批評というのはかなり普遍的な人間の活動で、例えばイエス・キリストだって当時のユダヤ教のテクストを批評した人だと思うし、それこそ釈尊とか、百年単位ではなく千年単位の永続的な活動であり営みだろうと。そう考えると近視眼的に批評の衰退や活況を論じなくてもいいのではないかと。それがまず1つあります。

そのうえで、確かに文芸批評的なものは売れないらしい。これちょっと謎なんですけど、にもかかわらず、文芸批評に限らない意味での「批評」全般、テーマ性があったり社会運動と繋がるような「批評」は、何となく活性化しているイメージがちょっとある。出版界や同人界隈にある。じゃあ批評と文芸批評の違いって何なんだろうと。

逆にいえば現在は、批評が多すぎるのだとも言える。SNSの作品感想と名のある人の批評の境界線が消えてなくなりつつある。わざわざ買って本を読まなくても、SNSで誰かの匿名的な感想を読めばいいじゃんと。割とそういう批評感覚が前提になってる気がする。たとえば新しい映画が公開されるとSNSで感想がわーっと出てきて、ある種の集合知のように批評的評価が決まっていく。ネット記事を書く批評家もそれを前提にしていますよね。スピード勝負だったり、ネットの評価を先読みして裏をかいたり。

だから今は逆に、批評の特定読者への囲い込みとか、自己価値化が必要なのかもしれない。ネット言語やウェブ批評と何が違うのかをちゃんと考えるというか。ある種の伝統芸能みたいな方向を突き詰めていくというか。個人的にはネット批評的なものも面白いんだけど、伝統芸能的な囲い込み、顔の見える読者との緊張関係も大事な気がする。その辺、両義的な思いがあるんですけど。

片上：まだまだ質問が来ていますが、終了時刻を過ぎておりますので、拾うべきものや言い残したことなどがあれば、お願いできますか。

杉田：先ほどの『人間失格』の話、男性のナルシシズムの危うさは依然としてありますよね。つまり男性が弱音を吐いていいとか、男性にも脆弱性があるとか、セルフケアが大事とか。それ自体が一昔前のイクメン言説のように、現代的な男性たちの卓越化の材料に使われる、資本に回収されるという側面もあって。弱さをさらけ出せる俺、かっこいい、みたいな。例えば『シン・エヴァンゲリオン』とか『ドライブ・マイ・カー』みたいな作品にはそういうところがある。僕は「ポスト男性学」のジレンマと呼んでいるんですけど。

しかし他方で男性の弱さの問題には、そういう風に回収されないラディカルな側面が依然あるとも考えています。そういう微妙な違いを取り出していくのも批評の役割なのでしょう。たとえば『エブリシング・エブリウェア・オール・アット・ワンス』のダニエルズが前に撮った『スイス・アーミー・マン』とか。あるいはその片割れの単独作品の『ディック・ロングはなぜ死んだのか？』とか。あの辺りは非常に面白いと思いました。あと、『バービー』の男性表象はどうだったのかとか。そんな風に考えたりもしますね。

水上：他にもいろいろご質問いただいてるんですけれども、時間も結構過ぎてしまっているので、ここで終わりにさせていただいて。

片上：では最後にお2人で、まとめとして締めの

対話をしていただいても宜しいでしょうか。

水上：どうしましょう。じゃあ、最後に一言みたいな。

杉田：色々うまくいえないところもあったんですが、楽しかったです。シスヘテロの「男」から出発する「批評と男性性」という方向性には、ちょっと行き詰まりを感じつつも、男性解放批評、メンズリブ・クリティークとでも呼ぶべきものを、もうちょっと掘り進めていければと考えています。

やっぱり色々な人と対話したり議論したりするのが大事だな、とあらためて感じています。今日も発見があったと先ほど言ったんですけど、自分だけでは決して考え得ないことを誰かと誤解であれ共に考えるというか、誤解を通して考え続けるというか。そういう形で、引き続き、自分にとっての男性解放的な批評のあり方を試行錯誤していきたいです。ただ、限界というか行き詰まりを感じているのも事実なので、どうすればいいんだろう、というのも正直な気持ちです。今日はありがとうございました。

水上：今日はありがとうございました。なかなかまとまらなかったり、うまく応答できてない部分もたくさんあったかなと思うんですけれども、今日杉田さんとお話しできてすごく良かったなと思ってます。今回お話しさせていただいたことって、結構男性性と文芸批評みたいなところが中心的な話題になっていたと思うんですけれども、このことがテーマになること自体に励まされました。というのは、過去に私が文芸批評から離れた1つのきっかけが、女性ならではの批評を書いてほしいってめちゃくちゃ言われたことがあったんです。女性でしか書けない何かがあるはず、女性的な文章を求められていて、文体についても、この文体はちょっと男性的過ぎるとか、そういうことをたくさん言われて、よく分からなかった。別にそんな女性ならではの書き方とか特にないのではみたいな、だんだんだるくなっちゃって、鬱屈した思いがあったんです。

それは7～8年くらい前の話で、その頃はまだ女性性と批評みたいな話で語られることが多かったし、過去にはずっとそうだった。エクリチュール・フェミニンみたいなフェミニストの中から積極的に語る、フェミニズム批評っていうものを押し出していくっていうものもありますけれども、当事者が言うのと言われてやるのは違いますよね。今でも「女性ならではの感性」みたいことをおっしゃる方ってたくさんいます。そういう形で女性性と批評っていうこと、あるいは女性性と何かがセットになって、いろんな形で押し付けられたり語られたりしてきた部分は確実にあると思っていて。

なのでこの場、あるいは杉田さんのお仕事とかいろんな違う形で、今、男性性と批評が問われるようになっているっていうこと自体が、私にとってはすごく新鮮というか、角度が変わった、語り口が変わってありがたいというか、いろんなことが変わったんだなって実感する1つのきっかけにもなっています。もちろん実際当事者として問いかけていく中で、杉田さんには本当にいろいろ大変な部分もたくさんあると思うんですけれども。今、男性解放批評を出すっていうお話がありましたけど、それが解放するのは恐らく男性だけではなくて、男性だけではない人々、私も含めていろんな人たちを解放する、いろんな批評の可能性を開くものだと私は思います。そういうお仕事をこれからも期待したいなと思ってますし、今日この場に呼んでいただけて本当にありがたく感じています。皆さんも来ていただいてありがとうございました。

片上：お二方、どうもありがとうございました。ジェンダーフォーラムでは今後もイベントを予定しております。もし、こんな話が聞きたいといった要望がありましたら、積極的に取り入れていきたいと思っておりますので、アンケートにご協力いただけると幸いです。本日はありがとうございました。